

---

研究報告

---

エジプト 早稲田大学ダハシュール北地区発掘調査報告  
—2004年 第9次調査—

吉村 作治\* 近藤 二郎\*\* 長谷川 奏\*\*\* 馬場 匡浩\*\*  
中川 武\*\*\*\* 西本 真一\*\*\*\* 柏木 裕之\*\*\*

An Interim Report on Excavation at Dahshur North, Egypt by Waseda University  
—9th Field Season—

Sakuji Yoshimura\*, Jiro Kondo\*\*, So Hasegawa\*\*\*, Masahiro Baba\*\*,  
Takeshi Nakagawa\*\*\*\*, Shinichi Nishimoto\*\*\*\* and Hiroyuki Kashiwagi\*\*\*

(Received : October 1, 2004 ; Accepted : February 23, 2005)

Abstract

The Institute of Egyptology, Waseda University, has excavated a mound located approximately 100m to the west of the tombs of *Ipay* and *Pashedw* dating back to the period from the late 18th to the early 19th Dynasties. Subsequently, a tomb was found, belonging to *Ta*, w 'b-lector priest of *Ptah*. The superstructure no longer existed, but its original plan was recovered. The tomb of *Ta* seems to have once had papyrus-shaped columns and *Djed*-pillars in the court. The construction method used for the superstructure, and the relief motifs and assemblage of finds suggest that the tomb is dated to the later part of the Ramesside period, so that the 20th Dynasty. The tomb of *Ta* covers several predated shafts, which remain untouched this season, but will clarify the chronological framework of this area. (*Waseda Journal of Human Sciences*, 18 (1) : 109-118, 2005)

**Key words** : Dahshur, *Ta*, Lector priest, Ramesside period, The 20th Dynasty

1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所は、ダハシュール北地区において、1997年以来8次にわたる発掘調査を行ってきた。調査隊は、この地で新王国時代の墓地

を発見した。ダハシュールはもとより、古王国時代や中王国時代のピラミッド・ゾーンとして著名な地であったが、ダハシュールは新王国時代の墓域研究に極めて重要な地域であることが認識されたのである。第1次調査から第6次調査までの中心的な調

---

\*早稲田大学人間科学学術院 (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

\*\*早稲田大学文学学術院 (*School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*)

\*\*\*早稲田大学エジプト学研究所 (*Institute of Egyptology, Waseda University*)

\*\*\*\*早稲田大学理工学学術院 (*School of Science and Engineering, Waseda University*)

査対象は、「王の書記」という称号をもつイバイなる人物の神殿型平地墓であった<sup>1</sup>。イバイの埋葬はみつからなかったものの、墓の地下から取り上げられた埋葬に関する遺物から、この墓は第18王朝末に建造されたもので、それが第19王朝初期まで利用されたことが推測されたのである<sup>2</sup>。遺物から読み取られたツタンカーメン王とラメセス2世の名は、この年代的枠組みを象徴していた。

さらに、第7次調査と第8次調査では、イバイの墓の南に位置するパシェドゥの墓が調査された。この墓の所有者の名は、墓の後部に取り付けられた小ピラミッドに刻まれた碑文から確認された。同人物の称号は不明であるが、イバイの墓の周辺からは、「執事」「門の監督官」「下エジプト王の印綬持ち」「王の右の扇持ち」などの称号を持つパシェドゥという人物の碑文がみつかったので、こういった役職と関連付けて考えることができるかもしれない。パシェドゥの墓は、その建造方法や埋葬施設の作られ方から、19王朝初期のラメセス2世の時代頃のものとして推測された<sup>3</sup>。

いずれにせよ、2003年までの調査で明らかになったことは、発掘調査を開始した墓地の南端には、明瞭な上部構造を持つ墳墓が2基分布していて、これらの周辺に、上部構造は有していたか判然としないより小型の墳墓が取り巻いていた構造が明らかとな

り、第18王朝末から第19王朝初期の時代までが、最も積極的な墓地造営の時期と考えられたのである。大型墳墓の形態が神殿型平地墓ということから、ピラミッド・ゾーンでみつまっている新王国時代墓地の中では、特にサッカラのウナス参道南側の墓地との関連が最も有力である。両地域は、5kmの距離を測るので、新王国時代の行政拠点メンフィスにおいて、なぜこのように離れた両地域で墓地造営が進められたのかという点を、研究課題に据えながらも、当面は墓地の構造と年代的な枠組みの細部を検証していくことが、第9次調査以後のテーマとなった。

## 2. 調査の方法と経緯

上記のような経緯を経て、発見された墓地の南端部分の所見が得られたため、第9次調査では、イバイの墓の100mほど西側を新たな調査地点とすることとなった。そこで、この地区の7,000㎡にわたる新調査地区に鉄条網を張り、従来どおりの10㎡のグリッドを設営した(図1)。地区の標高は、イバイの墓の周辺よりやや低い地形となっていた。新調査地区には、肉眼で表面観察をした段階で、既に上部構造を持った大型墳墓があったであろう有力な地点が観察されていた。そのポイントは、2E-30と3E-21であり、ここは1996年に行われた予備調査の段階で観察されており、ヒエログリフの碑文をもつレリーフ、

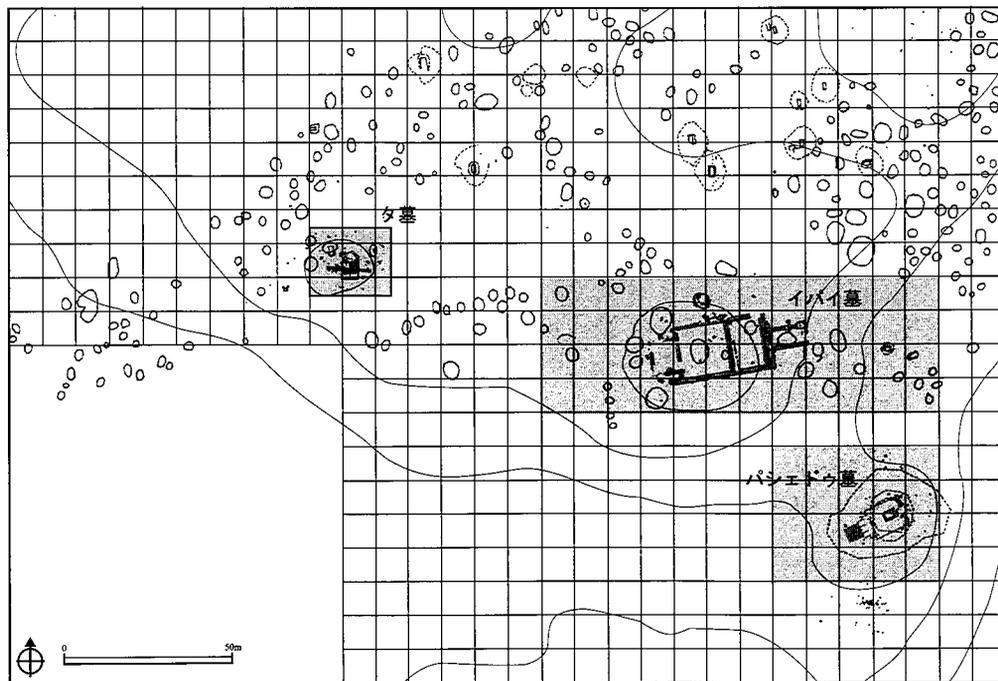


図1 発掘調査区域

花崗岩や珪岩の破片、彩文土器などが分布していることから、試掘が行われた地点であった。試掘の結果、石灰岩の切石を用いた遺構が分布している可能性が考えられた。

そこで今回改めて発掘を行ってみると、表層の砂層を剥いだ時点で、遺構の輪郭が見え始めた。墳墓の上部構造の床面や壁基礎は大きく破壊されており、ごく僅かしか痕跡が残存していなかったが、床面の基礎を形作っていた地業面の広がりなども考慮すると、墳墓の平面プランのあり方が想定されるようになった。この墓地の中庭にはシャフトが設けられており、シャフト内に堆積した風成の砂層を除去していくと、床面から9mほど下がった点から、地下の埋葬室が見つかった。したがって、次項の「出土遺構」においては、墓の上部構造と地下の埋葬室の2つのあり方を述べることとする。また、地上の遺構を検出している際と、地下の埋葬室をクリーニングしている段階で、多数の遺物が見つかり、中からは、墓の所有者の名と称号が判明した。これらの遺物の概要は、「出土遺物」の項で述べることとする。

今回みつかったこの上部構造をもつシャフトは、これまでのシャフト番号を継続して、シャフト40と呼ぶこととした。シャフト40の床面地業をクリーニングしている段階で、地業層のタフラチップ（岩盤を掘削いた際の掘屑）の下にシャフトがあることが

判明したためにシャフト41と呼称したが、第9次調査では日程の関係から、シャフト40の調査のみに集中して行うこととした。

### 3. 出土遺構

シャフト40は、上部構造は残存していなかったが、墓の南壁（東南隅部分を含む）の基礎部分が残存しており（写真1）、壁厚は、0.58~0.6mであった。これによって、墓の軸線は磁北の東西よりも3~4度南に振れたものと推測された。墓の北壁は全く残っていなかったが、シャフト40を床面地業として利用されていたタフラチップの分布範囲から、およそその位置が推測され、中庭の幅は、内法で4.6~4.7mほどと考えられた。墓の東端も残存していなかったが、同様にタフラチップの分布範囲で推測され、長軸の長さは12mほどと推測された。したがって、シャフト40の上部構造の長軸と短軸の比率は約1:2であり、その規模はパシエドウの墓の半分程度と考えられた。この大きさの壁に囲まれる空間は、東側に第1の中庭をもち、シャフトがある第2の中庭の後ろに、おそらく3室構造に分かれた礼拝室があったものと思われた。壁には日乾煉瓦が使用されておらず、表装の石板の間にモルタルや石灰岩チップを充填する建築工法であり、これはラメセス朝時代の特徴と考えられた<sup>4</sup>。



写真1 夕墓南壁体

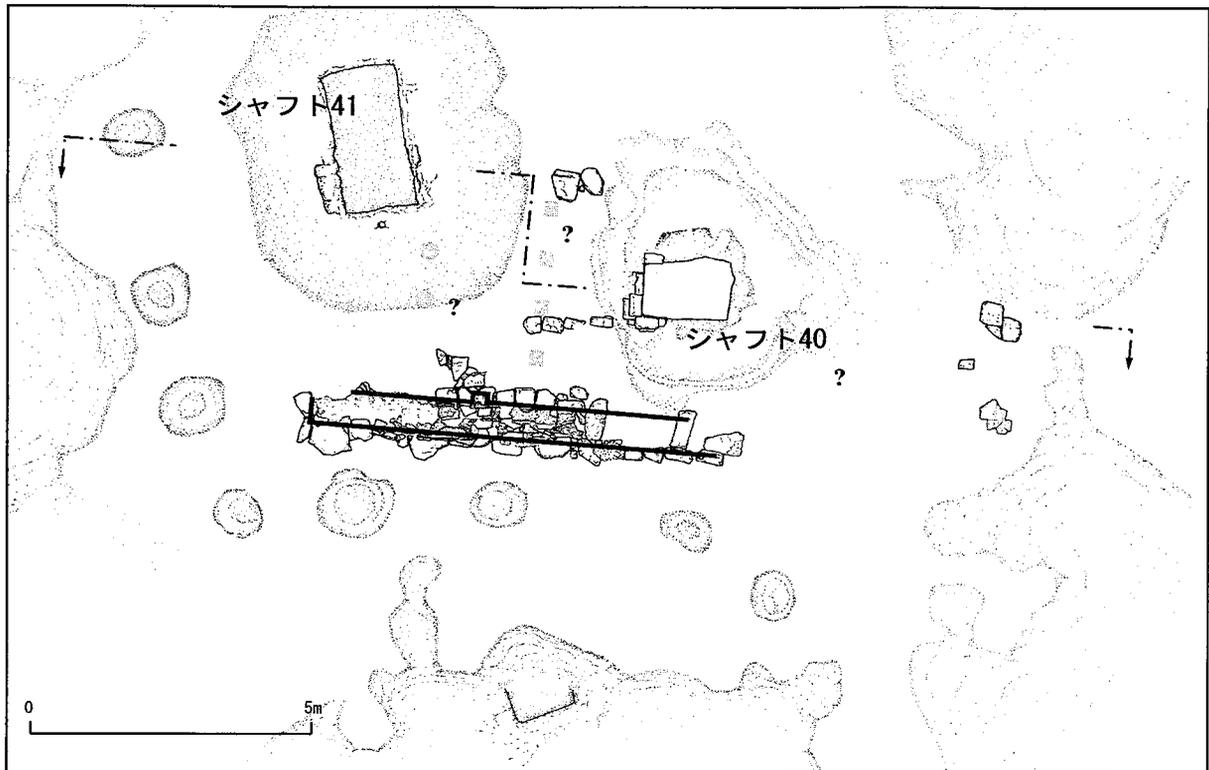


図2 Shaft40 (夕墓) 遺構復原図

「出土遺物」の項で述べるように、シャフトからいくつかの柱片がとりあげられ、これらの中から、円柱と角柱の存在が明らかになった。円柱はパピルス柱であり、墓の所有者が冥界の神を礼拝するレリーフが描かれたもので、礼拝室に立っていたものと推測された。また角柱は、中庭の後方で、礼拝室の前面に立ち並んでいたと考えられた(図2)。

シャフト(1.6m×1m)の深度は9mを測り、入り口周辺の内側には石材が貼られていた。シャフトが掘られた岩盤には、足掛けが残っており、シャフトは2層に分かれた構造になっていた(図3)。第1層は地表面から6mほどの位置にあり、シャフトの西側に、A室(3.3m×3.3m、高さ1.4m)とB室(2.1m×2.9m、高さ1.4m)が作られていた。A室には、上部構造に所属していたと思われる石材片、木棺片、ミイラの包帯などが散布していた。B室には砂が厚く堆積していたが、これは隣接するシャフト41とB室が接した際にできた穴から、シャフト41に堆積した砂がなだれこんできたものであり、今期は砂止めをして、来期にクリーニングすることとした。

岩盤は第1層より下からより安定したものになり、

地表面から約9m下から第2層の部屋が現れた。これらは、シャフトの西側に、C室(3.1m×3.5m、高さ1.5m)とD室(3.2m×1.6m、高さ1.6m)が作られていたが、両室の位置関係は第1層のように西側の奥につながるのではなく、D室はC室の南側に作られていた。C室の西側の壁が、矩形ではなく、シャフト41の地下室の軸線に合わせたようなラインによって作られていることから推測されるように、第2層の部屋を掘る際には、シャフト41との接触を避けるように作られたものと考えられた。またD室は、その入り口の作られ方から、建設当初は左右対称なプランを目指したものと思われる。C室とD室には、レリーフ片や葦にくるまれた人骨などの遺物が散布しており(写真2)、観察を進めたところ、床面直下にはこの墓の所有者の名(のちにタと判明)を持つ遺物群があり、その直上に2次的な埋葬がみられたが、この埋葬は1次埋葬とそれほど時期差が無いものと思われた。1次埋葬の痕跡は既に荒らされて残ってはいなかったが、取り上げられた遺物からは、墓の所有者タの名をもつものがいくつか確認された。

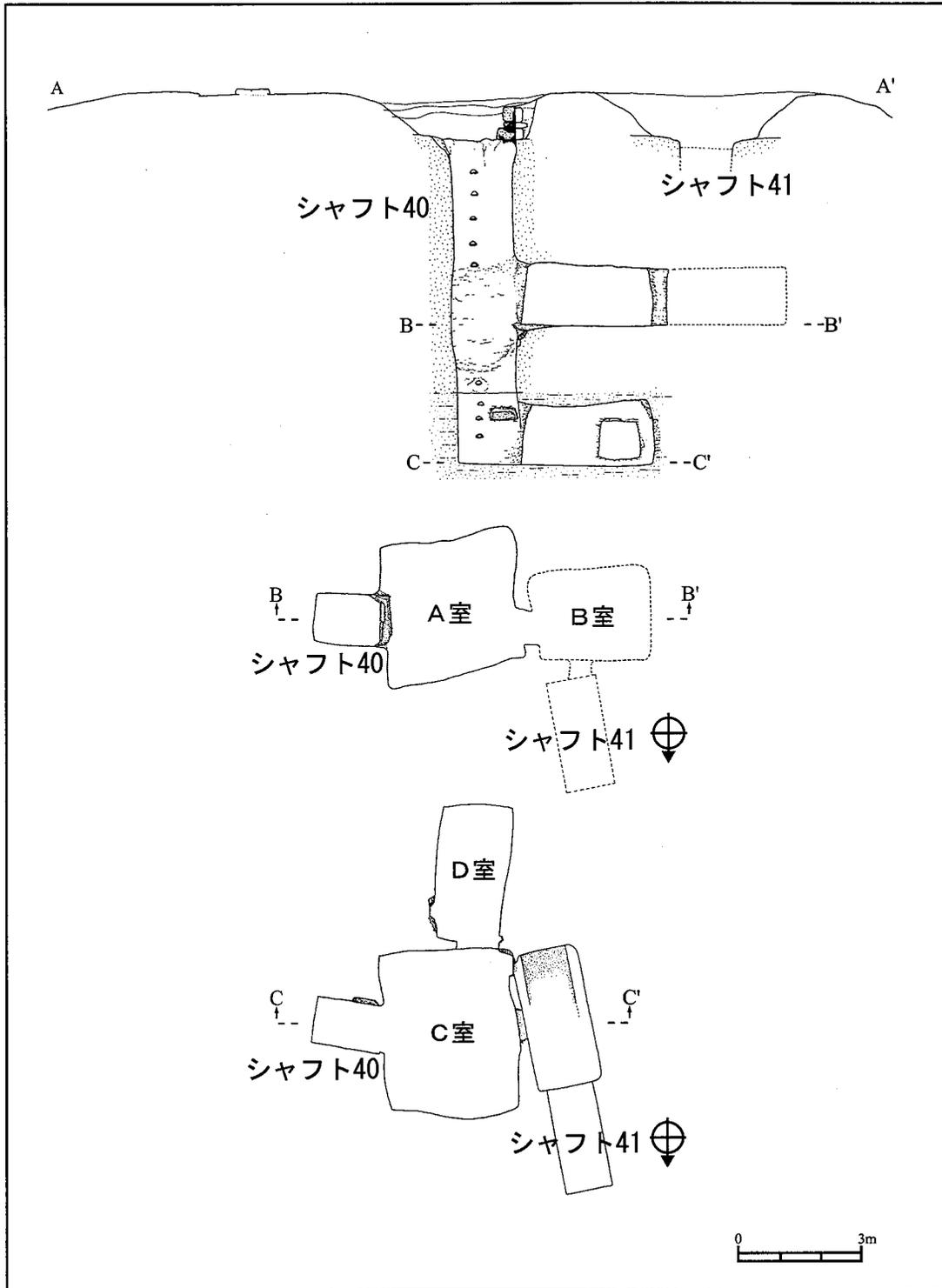


図3 夕墓地下遺構断面図及び平面図



写真2 夕墓C室遺物散乱状況

#### 4. 出土遺物

出土遺物の概要は、以下の通りである。

##### 1) 柱 (写真3)

シャフト40から柱片がいくつか取り上げられた。そのうちの代表的遺物は、石灰岩製の円柱 (高さ145cm、下部直径35cm、上部直径27cm) である。上部は失われているが、もともとは閉花式のパピルス柱

頭があったものと思われる。現存している柱下部には、パピルスの葉模様が刻まれている。柱の上部はパネルがあり、被葬者がアヌビス神を礼拝しているモチーフがレリーフで表されている。被葬者の上に記された碑文「*Wsir w 'b hry- hbt n Pth T3 m3'- hrw* (オシリス、ウアブ、朗唱神官タ、声正しき者)」から、この墓の所有者の名と称号が明らかとなった。柱の高さは250cmほどになると思われ、サッ

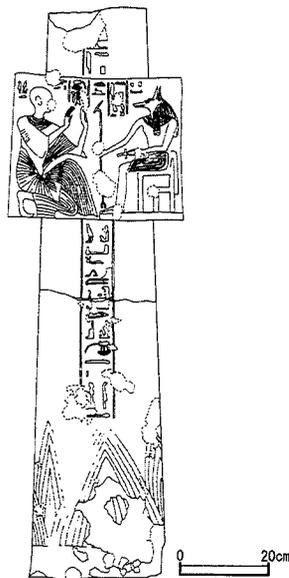


写真3 夕の円柱

カラでみられる類例から考えると、柱はもともと礼拝室にあったものと推測された<sup>5</sup>。

柱片にはさらに、少なくとも4つのジェド柱と呼ばれる角柱（長辺33cm、短辺24cm）があったことも明らかになった。柱には幟を掲げる被葬者タのモチーフと称号が表されていたようである。このジェド柱は、類例から考えると、元来は中庭の後部で、礼拝室の前面に、北側に2本、南側に2本あったものと推測された<sup>6</sup>。

## 2) レリーフ (写真4)

レリーフは、シャフト部とC室から取り上げられた8つの大型破片が接合されて、フリーズを含む建造物の装飾面が復元された。復元された場面は、3.5mほどの幅であるが、さらに広がっていたとみられる。フリーズの中央には、太陽神を礼拝するヒヒが向き合っており、ヒヒの後ろ側には、フリーズ装飾と被葬者タの名・称号が、交互に表されていたようである。フリーズ下部のボーダー線より下側には、太陽の聖船と神々の像が描かれている。壁面上部には、天 (*pt*) から現れた1対の男神が、聖船の運航を助けている。聖船の中央にはシンボルとしての太陽があり、上部には有翼スカラベの形をしたケベル神が描かれている。聖船の上には、さらに神々が立ち並ぶ。角の上に聖蛇（ウラエウス）を戴く羊頭のラー神を中央にして、聖船の前に、イシス神、トト神、マアト神、後ろにネフティス神と隼の頭を

もつ神（ホルス神？）が描かれている。船の舳近くには、聖台の上に指を銜えて座る子供のモチーフがみられる。一方、聖船の最後部は、かぎ状に折れ曲がった舳をもっている。そして、船の外側には、前面と後面の双方に、聖船上の神々より大型のサイズで、女神が描かれている。

このような聖船風景は、ルクソールの王家の谷に建造された王墓の壁画に類例をみることはできるが、レリーフとして表現されたものはほとんどみられない希少な例である。ここに描かれた聖船の舳は、「夜の船」と呼ばれる特徴を有している。一般的に、「アムドゥアトの書」や「門の書」で天の聖船はパピルス船として描かれるが、第20王朝になってはじめて、「天の書」において、《昼の船》と《夜の船》が区別して描かれるようになる。本遺跡出土のレリーフは、この《夜の船》の特徴が描かれていることから、タの墓は第20王朝に位置づけられる可能性が得られた<sup>7</sup>。

## 3) カノプス壺 (写真5)

C室から出土したアラバスター製のカノプス壺。これらは、4つの胴部 (a~d) と2つの蓋 (e, f) からなるもので、胴部の1つは完形であった。これらの壺は、赤色顔料や黒色顔料によって植物模様が描かれており、碑文が記されている。2つの蓋は、ホルスの4人の息子のうち、ケベフセヌウエフ (e) とハピ (f) であり、髪の様相や襟飾りが、黒、赤、

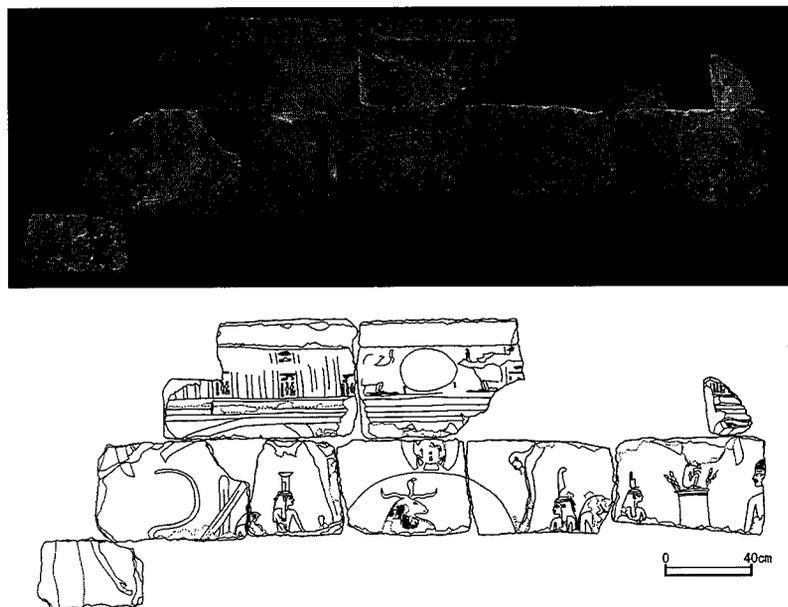


写真4 「夜の船」を描いたタのレリーフ

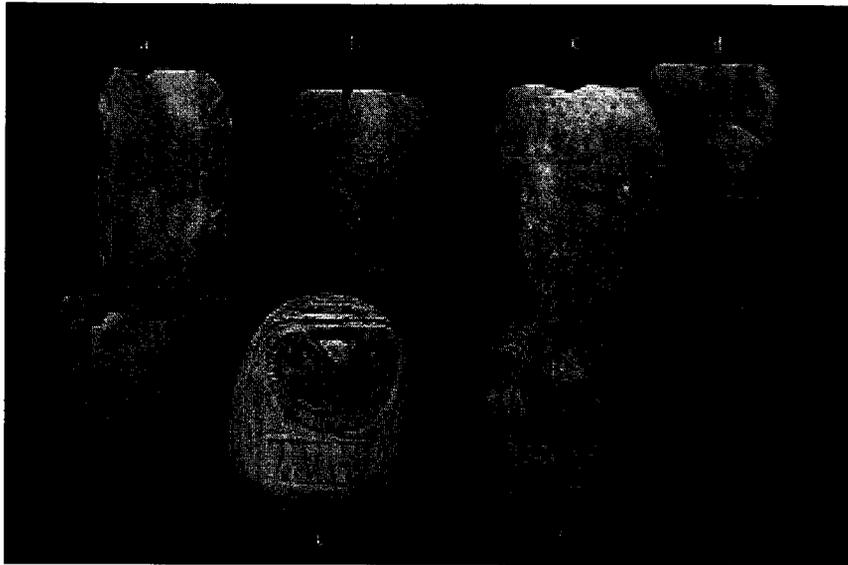


写真5 カノポス壺及び蓋

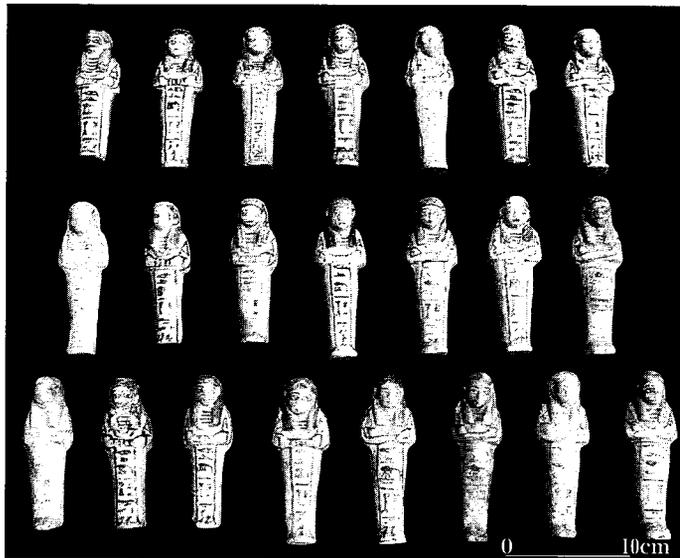


写真6 タのシャブティ群



写真7 装飾ガラス板



写真8 ハート・スカラベ

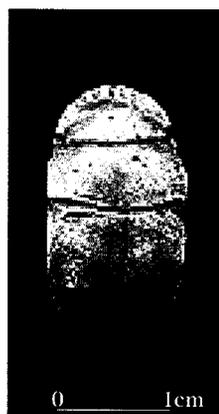


写真9 スカラベ



写真10 ホルスの護符



写真11 護符(刻線付)

緑の顔料で描かれている。

#### 4) シャブティ (写真6)

C室から出土したファイアンス製シャブティ。総計22の完形品が出土した。これらは、正面にタの名と称号が記されている。大きさは、いずれも長さが14.5cm、幅が5cm程度で標準的であるが、描かれている衣装はいくつか異なったものが見受けられた。C室からは、ファイアンス製のシャブティ以外にも、表面にビチュメンが掛けられて、黄色の顔料でラインが引かれたものなどがみつかったが、碑文は明らかではなかった。

#### 5) 装飾ガラス板 (写真7)

C室から出土した緑色の装飾用ガラス板。ガラス板の表面には、オシリス神、羽を広げたイシス神、ホルス神、ロータスなどが表されており、貴石が象嵌されていた。表面にはミイラ布の痕跡が残ることから、ガラス板はミイラの上に置かれていたものと推測される。

#### 6) ハート・スカラベ (写真8)

C室から出土したハート・スカラベ。材質は、片岩製と思われる。ここに表された被葬者の像では、折り曲げられた腕が水平に組まれ、髪の毛のラインは真っ直ぐに描かれている<sup>8</sup>。正面のキルト部分には、被葬者のタが座したオシリス神を崇拝している場面が刻線で描かれ、白色の顔料が埋め込まれて記されていた。また背面には、同様の手法で、タの名が刻まれていた。

#### 7) スカラベ (写真9)

C室から出土した青色ファイアンス製のスカラベ(長さ2.3cm、幅1.4cm)。このスカラベは完形であるが、碑文は記されていない。

#### 8) その他

タの墓の地下室から、青色ファイアンス製のウジャト、タの名が記されたガラス製のキルト形状をした護符、青色ファイアンス製のホルス(写真10)、タの名と称号が白色顔料で記された棒状の護符(写真11)などが出土した。C室からはまた、木製のアヌビス神の像の破片もいくつかみつかった。最も大型のもの(長さ33cm、幅6.3cm、高さ9.2cm)は彫像の一部であったと思われるが、他のものはシャブティ箱の蓋に取り付けられたものであったと推測された。これらには表面に黒色のビチュメンが施されており、その上に黄色の顔料で装飾が施された。そ

の他には、木製棺の足の部分がみつかった。

#### おわりに

今期の調査では、新たに墓地の南西地区の調査を行ったところ、この一角から、上部構造をもつ墓がみつかり、所有者は、プタハ神のウアブ神官朗唱神官であるタという人物であると推測された。上部構造は殆ど残存していなかったが、床面の地業層の広がりなどを勘案したところ、おおよそのプランが推測され、中庭の後部から礼拝室にかけては、ジェド柱という角柱やパピルス柱の円柱などを持つものであったと考えられた。地下室は2層の構造からなり、タの埋葬に関わる資料が多数取り上げられた。上部構造の基礎部に残る壁体の構築技法や、墓の地下室から取り上げられた遺物の全体像から、タの墓はラメセス朝のものであることが推測されたが、さらに年代を決定付ける遺物が出土した。これは、聖船の航行を描いたレリーフであり、ここで表現された聖船が《夜の船》を表したものと想定されることから、年代は聖船の描き方に《昼の船》との違いがみられる第20王朝に位置づけられる可能性が有力となった。

第1次調査から第8次調査まで、墓地の南端地区を調査した折には、調査地区の編年は、第18王朝末のツタンカーメン王時代あたりから、第19王朝初期のラメセス2世あたりまでを中心とした枠組みが作られていたが、今回調査地区を南西地区に広げたことによって初めて編年の枠に第20王朝を視野に入れるべき有力な証左が得られたこととなる。来期以降は、タの墓に隣接して設けられたシャフト4Iなど、周辺墳墓の調査を進めて、墓地の構成をより明確にしていきたい。

本発掘調査に際しては、現地における許可関係の取得にあたり、以下のエジプト考古最高会議の方々のお世話になった。ザーヒー・ハッワース博士(考古庁長官)、アーテフ・アブ・アル＝ダハブ氏(ギザ・サッカラ査察局長)、カマール・ワヒード氏(サッカラ査察局長)、アーデル・アカーシャ氏(査察官)。

なお、発掘調査と帰国後のデータ整理において、菊地敬夫(早稲田大学理工学総合研究センター・客員講師)、和田浩一郎(早稲田大学エジプト学研究所)、小岩正樹(早稲田大学理工学研究科博士課程)、鈴木晶子(早稲田大学大学院文学研究科修士課程)、南澤

武蔵（早稲田大学文学部学生）の諸氏にご協力を得た。末尾ながら、記して謝意を表したい。

註

- 1 Yoshimura, S., J. Kondo and S. Hasegawa, "A Japanese Expedition Discovers the New Kingdom Necropolis at Dahshur", *KMT: A Modern Journal of Ancient Egypt* 10-3, 1999, Sebastopol, pp.36-43. ; Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "A Ramesside sarcophagus at Dahshur", *Egyptian Archaeology* 15, 1999, London, pp. 5-7. ; Yoshimura, S. and S. Hasegawa, "New Kingdom necropolis at Dahshur —The tomb of Ipay and its vicinity", in Barta M. and J. Krejci (eds.), *Abusir and Saqqara In the Year 2000*, Praha, 2000, pp.145-160. ; Hasegawa S., "The New Kingdom Necropolis at Dahshur", in Hawass, Z. (ed.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century* vol. 1, Cairo, 2003, pp.229-233.
- 2 イパイの墓のプランは、サッカラのホルエムヘブの墓との類似が推測された。Martin, G.T., *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-chief of Tut'ankhamun I*, London, 1989, pl. 5.
- 3 箱型の埋葬ピットの作られ方が、サッカラのティアの墓と類似していた。Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia ; A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London, 1997, pl. 6.
- 4 小岩正樹、西本真一、中川武、柏木裕之、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、馬場匡浩「ダハシユール北部で発見された新王国時代の建造物について13-タの神殿型貴族墓」日本建築学会梗概集、2004年。ラメセス朝時代の建築工法については、以下の通り。Van Dijk, "The Development of the Memphite Necropolis in the Post - Amarna Period", in Zivie A., *Memphis et ses nécropole in Nouvel Empire*, Paris, 1988, pp.42-43.
- 5 Martin, G.T. (1997), *op. cit.*, p.26, pl.5, pls. 44-45.
- 6 西本真一、中川武、柏木裕之、小岩正樹、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、馬場匡浩「ダハシユール北部で発見された新王国時代の建造物について13-タの神殿型貴族墓」日本建築学会梗概集、2004年。ジェド柱はやはりラメセス朝から一般的になる。Aly, M.I., "New Kingdom scattered blocks from Saqqara", *MDAIK* 56, Mainz, 2000, pp.223-237.
- 7 この聖船に関する情報は、和田浩一郎氏による。類例の文献は以下の通り。Assmann, J., *Egyptian Solar Religion in the New Kingdom: Re, Amun and the Crisis of Polytheism*, London, 1955 ; Assmann J., *Grabung im Asasif*, Mainz am Rhein, 1977, pp.90-92, Tafel 41. ; Assmann, J., *Das Grab des Basa (Nr.389) in der thebanischen Nekropole*, Mainz am Rhein, 1973, p.76, Tafel XIII. ; Hinkel E.W. and Yellin J.W., "Royal Pyramid Chapel of Kush Project", *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists*, Leuven, 1998.
- 8 Petrie, W.M.F., *Amulets*, London, 1914, p.36, pl. XXVIII a-g. ; Andrews, C., *Amulets of Ancient Egypt*, London, 1994, p.65, pl.61.